朝鮮古蹟調査と「古蹟及遺物保存規則」について

植民地時代韓国における古建築物保存政策 (その1)

STUDY ON THE RELICS RESEARCH OF CHOSEN AND PRESERVATION RULE
OF RELICS AND OBJECT

Preservation policy of historic building in colonial period (Part 1)

李明善*

Myung sun YI

This paper focuses on the property research Prof. Tadasu SEKINO and the preservation rule of relics and objects established by the Government-general of Chosen in 1916. The selections of properties research by Tadasu SEKINO were made depending on the two standards; his personal concerns and research on urban facilities which the Government-general of Chosen planned. The property research made by Tadasu SEKINO in 1909-1911 was classified into four groups according to the historical value. Through the preservation rule of relics and objects established in 1916, the preservation policy was implemented mainly about historical objects. The author concludes that the research on historic building and preservation method at that period shows obvious change of perception from just 'figure' to 'cultural property'.

Keywords: relics research of Chosen(Korea), cultural property, preservation policy, historic building, Tadasu Sekino, colonial period

朝鮮古蹟調査、文化財、保存行政、古建築物、関野貞、植民地時代

1 序

本稿の目的は、植民地時代韓半島というフィールドで行われた朝鮮総督府による古蹟調査と、その後の保存行政がどういう過程をへて、どのように実施されたのかについて、その全体像を明らかにすることにある。韓半島には1916年、1933年に文化財保存行政の転換点というべき法的制度が確立された。本稿では、近代的「文化財」概念がどう導入されてきたのかを探るべく関野貞を中心とした、とりわけ古建築物を対象にした調査の内容と性格を検討する。また、植民地時代韓半島における文化財保存政策の方向性を最初に打ち出した1916年制定の「古蹟及遺物保存規則」を取りあげ、その制定背景と実施過程を考察することにする。なお、次稿では、古建築物に対する保存修理事業が本格的となった契機を与えた、1933年の「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」制定の背景とその指定物件のうち古建築物を中心に分析する。

1902年関野貞による韓国古建築調査は、20世紀初頭韓国における日本人学者の多方面にわたる調査活動のうち、最も早い時期に韓半島全域を対象にした調査として意味深い。このときの調査は建築物が調査の中心であったが、その後調査範

囲は遺蹟、遺物、史料まで広がり、数多くの学者たちが韓国の地を踏みきつかけとなった。1910年日韓併合以後、韓半島における古蹟調査は、朝鮮総督府の事業として莫大な支持を得て行われた。5年あまりの調査成果を踏まえて、1916年「古蹟及遺物保存規則」が制定され、その本格的保存行政が始まることとなった。さらに、この規則を法的本拠とし以後の調査にも拍車を加えた。日本人学者への依頼による調査体制から、1916年古蹟調査委員会発足により朝鮮総督府内に調査主体が整ったことは、保存行政にも大きな変化をもたらしたと思われる。

朝鮮総督府の植民地政策は文化財保存方針を生み出し、また総督府は韓半島におけるすべての調査研究活動に何らかの形でかわかり、その窓口の役割を果たしていた。総督府の保存行政側から当時の保存の様相を検討する必要がある理由がここにある。

近代的保存論理、「文化財」という新しい概念を移植しようとしたとき、どのような葛藤があったのか。特に、古建築物に関しては「物」から「文化財」に移っていく意識の変化の断片をみることができる。

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

2 既存研究

文化財保存行政、特に韓半島に関しての研究は、その蓄積が乏しく、年代別・事件別の列挙にとどまっているのが現況と言える。また当時朝鮮古蹟調査に参加した、または保存行政に直接係った、いわゆる当事者の懷古談に近く、考古学の立場からの叙述が多いのも現行研究の特徴というべきである。

文化財保存行政に関する既存研究のうち、鬼頭清明氏の分析を取り上げる。鬼頭氏は戦前日本の文化財行政を時期別に3段階に分け、その総括を試みた¹。第1段階(1878-1894)の前期は文明開化とともに啓蒙的色彩をもち、後期は帝国博物館の設立などを中心に国家主義的色彩を帯びてくる。第2段階(1895-1931)は天皇中心主義が強く文化財行政に影響を与える一方、朝鮮、中国への侵略とともに文化遺産の蒐略が始まる。第3段階(1932-1945)は天皇中心主義、軍国主義のイデオロギーが浸透し、その道具として文化財が利用されたと分析した。その中で鬼頭氏は、植民地時代日本による韓半島での保存政策について言及しているが、第2段階の時期に朝鮮の遺物蒐集が組織的に行われたことと、「古蹟及遺物保存規則」の強力な規制中心主義などを指摘している。

藤田亮策氏は、韓国の文化財保存について政治的出来事を中心にどのような調査が行われたかを記している。また朝鮮総督府の古蹟調査事業の実施過程、関連団体の役割と性格を年代別に述べている²。特に文化財保存政策に寺内総督の意見がうまく反映されたことと業績に言及しており、年代別の事件を叙述した。

西川宏氏は、朝鮮考古学の研究史を大きく3段階に分け、そのうち、第2段階を日本人学者独占の研究体制が構築された時期に想定している。とりわけ、今西竜などの文献史家が考古学に侵出したことに注目し、考古学が文献に依存するという、日本における朝鮮考古学の一つ的方法的特質がうち立てられたと主張している³。

関野貞の韓半島における調査に対する研究では、藤田、西川氏も指摘しているが、最近の研究を中心にみると、韓三建氏と木曜クラブの論文が目立つ。韓氏は1910年までの関野貞による韓国建築調査に重点をおきながら、韓半島に対する関野貞の、朝鮮美術の独創性、歴史発展を否定する見方が以後保存活動に影響を及ぼしていると記述している⁴。なお、『考古学史研究』⁵により1902年、1909年から1915年にかかる調査日程と内容、性格究明が行われた。これは編年的整理にとどまった既存研究に比べて一歩進展した成果とも言える。しかしながら、この研究はあくまでも考古学側からの接近であり、当時主要調査対象であった古建築物がどう扱われたかに関しては触れてない。

植民地時代の韓半島で一貫して行われた文化財行政に対する研究は、終始非難するかまたは業績だけを称える、という一方的な主張が多く、多方面からの明確な分析が欠けている。本文では、関野貞による1909年から1911年までの古蹟調査と1916年の「古蹟及遺物保存規則」の内容と、それに基づ

いて調査・登録された古建築物を考察する。その基礎資料として関野貞が3年間調査対象の価値を等級付けた「朝鮮遺蹟一覧」⁶をとりあげる。

3 植民地時代の古建築・古蹟調査

1901年9月東京帝国大学助教授に赴任した関野貞は、翌年6月大学から韓国⁷の建築調査を命じられた。韓国滞在期間は62日間で、「此期限内ニ於テ成ベク多ク有益ナル材料ヲ獲ンコトヲ企テ」⁸新羅、高麗、朝鮮時代の各々の首都である慶州、開城、ソウルとその周辺を中心に調査を行った。当時の調査で建築物、特に宮殿、城郭、寺院、書院、陵墓、石造物などが重要な対象であったが、彫刻や工芸品までも範囲が及んだ。

当時東京大学工科大学学長の辰野金吾は、韓国出張前の関野貞に「成ルベク広く觀察セヨ浅キヲ妨ケス」⁹と命じていた。この指示を受けた関野貞は決められた期間の中、韓国建築の全体像を把握するために、実測より写真を利用するなど、かなりの速度で韓半島全域を歩きまわった。このときの調査の成果物として1904年「韓国建築報告」が出版された。

1909年、統監府の依託により関野貞の韓半島全域にわたる古蹟調査が始まった。この調査は、1910年8月日韓併合以後にも朝鮮総督府内務部地方局に引き継がれ、1915年まで毎年調査が実施される。当時韓半島の最大権力機関であった、統監府は韓国の司法行政権接收に伴う建築物の取扱いに関して専門家の意見を聞く必要があった。当時統監府は朝鮮時代の官衙、廟祠、郷校などの建物を旧建築物として認識していた。その「建築専門家」として選ばれたのが、1902年韓国全土を調査したことがある関野貞である。

関野貞は統監府が調査目的とした旧建築物調査に、寺院・古蹟などを加え調査を行った。1909-1912年の4年間の調査成果はそれぞれ出版されている¹⁰。

そもそも統監府によるこの調査の目的は、旧建築物が新しい行政施設に転用、あるいは破壊撤去の恐れがあるので、その重要度によって保存することにあるという¹¹。そのため関野貞は、調査対象の価値を甲乙丙丁の4等級に分類し、それに基づいて保存の度合を決めた。調査対象の価値に言及しさらに保存の必要程度まで決める、という方法は1909-1911年の3年間引き続いて実施された。この3年間の調査を詳しく検討する必要がある¹²。

1909年の調査では、主に建築物が調査対象となった。1904年『韓国建築調査報告』で、多くの紙面が費やされたソウルの宮殿は、比較的にその関心度が薄くなったが、一つの特徴として当時正宮である昌徳宮が主に取り上げられた。それに比べて昌慶宮の場合は、1907年7月純宗即位記念としてすでに宮内の建物の応急修理をおこない、内部を整備し博物館施設として陳列に充当し、1909年博物館、動植物園を改めて昌慶苑とし一般公開されたのである¹³。

この年の調査対象は次の4段階に分けられ価値付けられた。

(甲) 優秀なるもの

- (乙) 之に次ぐもの
 (丙) 之に次ぐもの
 (丁) 最価値に乏しきもの

また、この価値基準がその保存にも適用された。

- (甲)・(乙) は、此両者は特別保護の必要あるもの
 (丙)・(丁) は、此両者は特別保護の必要を認めざるもの
 但丙の者は他日朝鮮全部の調査を了せる後に至らば比較調査上乙に編入すべきものもあるへし¹⁴

1910年の調査では、主に古代文化の状態および変遷を知ることができる資料について幅広く調査された。そのため、建築物以外の石造物や遺物などが多く取り上げられた。ここでも、遺物の価値、保存度合を次のような4段階に分類した。

- (甲) 最も保存の必要あるもの
 (乙) 之に次ぎて保存の必要あるもの
 (丙) 今日迄の調査に依れば強て保存必要が認めざるもの
 (丁) 保存の価値最も少なきもの

1910・1911年調査で甲乙丙丁の等級は、保存と直接結びついている。モノの価値と保存が一体化となっており、この調査が単なる学術調査ではなく、今後の保存方針に重要な軸として用いられることを明確に示しているともいえる。

1911年調査で関野貞は朝鮮総督府より史料調査を嘱託された。1ヶ月半という短い調査期間もあって調査件数も比較的小なく、主に「古代における民族の史蹟に関する端緒を得るため」¹⁵古墳、古代遺蹟址などを対象にした調査が目立つ。

統監府の意図による旧建築物の等級づけと、関野貞の古建築物の価値判断はどこにその接点があるのだろうか。古蹟調査、特に1909年から1911年、3年間行われた調査は、行政

側の要請による旧建築物、客舎、郡庁、郷校と、関野貞個人的関心対象の寺院、石造物の調査という2つの性格を持つ。

関野貞の地方都市調査の事例として1910年晋州調査をあげてみる。10月28日晋州に着いた関野貞一行は11月1日まで泊まり、晋州とその付近をまわって遺蹟、古建築物を調査した¹⁶。関野貞一行は29日から轟石樓、客舎、郷校、文廟など晋州の中心部にあった旧行政施設に関する調査が行った。また晋州から東方面15キロ離れて月牙山ふもとにある青谷寺にまで足を伸ばし、青谷寺大雄殿を乙等級に分類するなど調査をおこなった。同様に関野貞らは3年間だけで韓半島の地方都市約50箇所を調査した。大体各地方の中心の行政施設に関する調査と寺院の遺蹟及び遺物調査が並行になされた。

関野貞によると、建築物全体のうち31.7% (176/555件) が甲乙等級である反面、旧建築物(客舎、文廟、郷校、城門など)の場合平均16.7% (44/262件) だけが甲乙等級に分類された。つまり「新しい施設」に利用するために調査対象になったと考えられる客舎、文廟、郷校、城門などの価値は他の対象より低く、その保存の必要性もそれほど切実ではないと判断された。1909年調査で義州の客舎であった聚勝堂は、この時点ですでに裁判所として利用されており、梁山の雁鷺堂も警務所で使われていた。すなわち、日韓併合以後、短期間で韓半島の地方まで掌握し植民地政治体制に移すために、旧建築物の転用は最も有効な方法として選択されたのである。

ちなみに、関野貞は寺院の石造物や遺物に関しては詳細に分類しているのに対して、ソウルの宮殿や各地方の旧建築物を「王宮城門及官衙」と一つにまとめて記述した¹⁷。

関野貞を中心とした古蹟調査は、朝鮮総督府の文化財行政

等級	名称	地方	調査年度	等級	名称	地方	調査年度	等級	名称	地方	調査年度
丁	安興館南門	安州	1909年	丙	客舎内三門(鳳館門)	晋州	1910年	丙	客舎内三門	南原	1910年
丙	安州城北門(鎮北樓)	安州	1909年	丙	客舎外三門(儀鳳樓)	晋州	1910年	丁	客舎	咸安	1910年
乙	内城北門(清南樓)	安州	1909年	丙	旧道廳宣化堂	全州	1910年	丁	郡廳舎	咸安	1910年
丁	客舎(安興館)	安州	1909年	丙	城北門(拱北樓)	全州	1910年	丙	客舎鳳城館	求禮	1910年
乙	百祥樓	安州	1909年	丁	城西門(沛西門)	全州	1910年	丁	郡廳舎	求禮	1910年
乙	客舎(益城館)	金海	1909年	丙	城南門(豊南門)	全州	1910年	丁	郡廳舎正門	求禮	1910年
丙	黄州客舎	黄州	1909年	丙	旧道廳布政殿	全州	1910年	丁	客舎内三門	羅州	1910年
丁	黄州郡守衙門	黄州	1909年	丙	郡廳正門	沃川	1910年	丙	客舎錦城館	羅州	1910年
丁	聚勝堂(裁判所)	義州	1909年	丁	郡廳舎	沃川	1910年	丙	郡廳正門(正綏樓)	羅州	1910年
甲	南門	義州	1909年	乙	沃州館(客舎)	沃川	1910年	丁	郡廳舎	羅州	1910年
乙	客舎(東京館)中座、左右翼	慶州	1909年	丙	客舎雪山館	宝果	1910年	丁	城北門(北望門)	羅州	1910年
丙	昌城南門	江華島	1909年	乙	客舎	高靈	1910年	丁	城西門(西城門)	羅州	1910年
丁	内三門	大邱	1909年	乙	客舎伽倻館	高靈	1910年	丙	城東門	羅州	1910年
丙	望郷樓(達城公園内)	大邱	1909年	丁	郡廳舎	高靈	1910年	丙	城南門	羅州	1910年
乙	大同館	平壤	1909年	丁	郡廳舎	高靈	1910年	丙	客舎正門望華樓	羅州	1910年
丙	大同門	平壤	1909年	丙	客舎	谷城	1910年	丙	客舎	靈山	1910年
甲	普通門	平壤	1909年	丁	客舎正門皇華樓	光州	1910年	丁	郡廳舎	靈山	1910年
丙	朝陽南樓	永川	1909年	丙	客舎光山館	光州	1910年	丙	客舎秋興館	江東	1911年
丙	永陽館	永川	1909年	丁	拱北門	光州	1910年	丁	郡廳重清閣	江東	1911年
丁	雁鷺堂(警務所)	梁山	1909年	丁	郡廳舎正門	報恩	1910年	乙	客舎門	江東	1911年
丁	郡衙	梁山	1909年	丁	郡廳舎	報恩	1910年	丙	客舎正廳	鳳山	1911年
丁	開城西小門	開城	1909年	乙	客舎星山館	星州	1910年	丁	客舎門	鳳山	1911年
丙	開城成均館	開城	1909年	丁	郡廳舎及正門	星州	1910年	乙	客舎東明館	成川	1911年
乙	太平館	開城	1909年	丙	客舎龍州館	昌平	1910年	丁	郡廳来仙閣	成川	1911年
甲	南大門	開城	1909年	丁	郡廳舎正門九二樓	昌平	1910年	乙	客舎正門	成川	1911年
丙	客舎	寧邊	1909年	丁	郡廳舎	昌平	1910年	丁	客舎中門	成川	1911年
乙	南門	寧邊	1909年	丙	客舎龍城館	南原	1910年	丁	客舎東西廡	成川	1911年
丙	客舎	海南	1910年	丙	郡廳(喚月樓)	南原	1910年	乙	客舎隆仙樓(附十二樓朝臺閣)	成川	1911年
乙	城南門海晏樓	海南	1910年	丁	郡廳舎	南原	1910年	丁	郡廳羽化門	成川	1911年
丁	客舎及三門	益山	1910年	丁	郡廳内三門	南原	1910年	丙	碧蹄館	高陽	1911年
乙	客舎	晋州	1910年	丙	客舎外三門	南原	1910年	丙	客舎	龍岡	1911年

<表一、1909-1911年間、関野貞によって調査された旧建築物とその価値付け>

が確立していない時期に先立つ調査として、その意味は深い。特に3年間のランク作業は、その後保存行政側にどのように利用され、どのような結果をもたらしたのかを追跡する必要があるであろう。

4 「古蹟及遺物保存規則」(以下「保存規則」)

(1) 「保存規則」以前

1910年6月制令第7号に定められた「寺刹令」第5条には、寺院所有の建物、石造物、遺物などは朝鮮総督府の許可を得なければその位置を変更することができないという規則があった。また1915年8月朝鮮総督府令第82号「神社寺院規則」第13・14条では、神社・寺院所有の建物の所在地、名称、構造の種類などを、また宝物に関しては名称、員数、品質、形状、寸尺、作者および伝来を朝鮮総督に届出することと変更の場合許可を得ることを義務付けた。

「寺刹令」と「神社寺院規則」は、日韓併合以後朝鮮総督府の宗教政策の一環として発布された法律である。そのなかで古建造物や遺物などの文化財は、寺院所有財産の一部として捉えられ、現状把握の程度にとどまった。特に、「寺刹令」を法的根拠とし遺物売買を禁じ、その散逸を防いだが、文化財保護の方向が立たず、そのまま放置していた。当時の消極的ともいえるこのような制度に対して、公有私有の区別を明らかにし「公有物は国宝としてそれぞれの保護方法を立て私有物は売買を自由にして朝鮮の古芸術品を世に紹介する、また慶州古跡保護法を定める」ことを主張する声もあがっていた¹⁸。

前項で述べた関野貞らの古蹟調査の結果は毎年積み重なって考古学、歴史、建築関連雑誌に次々と発表された。しかし、日韓併合と同時にすばやく実施されたこの古蹟調査の成果は、保存の段階までは行かなかったが、総督府の保存行政に反映され、「保存規則」の制定を促したのである。

(2) 「保存規則」の発布

1916年7月4日朝鮮総督府官報に、朝鮮総督府令第52号「保存規則」、朝鮮総督府訓令第29号「古蹟調査委員会規定」、朝鮮総督府訓令第30号「古蹟及遺物に関する件」が載っている。この日の官報最後の部分には、「保存規則」の韓国語訳文と一緒に載っているのが特徴とも言えるが、これはその内容を広く知らせるための方法と見られる。

「保存規則」によると、各地方当該官庁は朝鮮総督府に報告し、最後に朝鮮総督が古蹟調査委員会の諮問に基づいて登録する、という過程を経る。また「保存規則」第3条には、古蹟および遺物の発見者はその事実を当該官庁に届出を出す義務があると明記された。その登録の際には名称、種類及形状大小、所在地、所有者及は管理者の住所氏名、現況、由来伝説、管理保存の方法を記入し、その登録台帳を作成した。

(3) 「保存規則」による登録物件

「保存規則」は、全8条で構成されており、主に古蹟、遺物がその対象になっている。古蹟とは、貝塚、石器骨角器類を包有する土地及竪穴などの先史遺蹟、古墳並び都城、宮殿、

城柵、関門、交通路、駅、燧、官府、祠宇、壇廟、寺刹、陶窯などの遺跡及戦跡その他の史實に関係ある遺蹟を指す。また遺物とは、年代を経た塔、碑、鐘、金石佛、幢竿、石燈などにして歴史、工芸その他考古の資料とするべきものを指す。価値基準には史実に関係あるもの、また考古資料となるものかどうかが決め手となった。この基準は当時日本で議論されていた史蹟保存との関係性をうかがわせる¹⁹。

「古蹟及遺物に関する件」には古蹟、遺物または古文書を発見した場合「保存規則」に基づき朝鮮総督に報告すべし²⁰という項目がある。古蹟、遺物と同じく古文書が重要対象になったのは、当時朝鮮史編纂が総督府事業として古蹟調査と並行して行われていたこともあって、古文書の収集に力を入れていたのである。

1924年段階で登録された192件を種類別にみると²¹、寺址並びに遺蹟に残った石塔が最も多く、その他碑、幢竿支柱、石仏像などの石造物も多数を占めている。また京城普信閣鐘、忠州南門外鉄仏像などの遺物も少数登録された。その所有は例外なく国であり、個人所有のものは除外された。

「保存規則」によって第1号に登録された圓覺寺址十層石塔には、保存対策としてその周囲に鉄柵が設けられた。その他の遺物などにも管理保存の方法として柵を設ける、錠を施す、または石垣に扉をつけるなどの措置が取られた。いわゆる遺物への接近を制限することが文化財保存の方法として重点的に行われたことがわかる。

このときの登録物件192件の中、1909-1911年に関野貞によってすでに調査され価値づけられたものが40件含まれている。1909年調査で仏国寺多宝塔と同じく高く評価され甲等級に分類された扶餘平百済塔²²は「保存規則」により第43号に登録された。その他にもその大半が甲乙等級に分類されており、関野貞による基準が朝鮮総督府の古蹟調査に受け継がれ、また1916年「保存規則」にも表れているといえる。

(4) 「保存規則」と古蹟調査委員会

古蹟調査委員会は「保存規則」制定と同じ時期に設置された。「古蹟調査委員会規定」によると委員会は、調査・保存・登録・出版という、大きく4つの事業を行った²³。委員会のメンバーとして総督府関係者以外、関野貞、黒板勝美、今西龍、鳥居龍蔵、小田省吾、浅見倫太郎、工藤壮平、劉猛、柳正秀、谷井済一、馬場是一郎、濱田耕作、原田淑人、池内宏、梅原末治が参加した²⁴。

1916年以前に統監府、または総督府依頼により関野貞らが韓半島各地域を調査した。当時保存行政というべく動きはなく、ただ学者たちの保存に対する意見だけが相次いでおり²⁵「保存規則」発布と古蹟調査委員会設置により文化財調査および保存管理が一元化された。

(5) 「保存規則」の特徴 1-警察署との関係

「保存規則」によると古蹟・遺物の発見、現状変更、移転、修繕などの行為について、その地方警察署²⁶に報告することを義務付けた(第3, 5, 6条)。また、古蹟及遺物登録台帳を警

察署に配布し登録の際、当該警察署長をへてその趣旨を申告人に通知することを規定している（第4条）。

このような条項を通じて当時なんらかの措置が行われた文化財の管轄は、その所在を担当する地方警察所下にあったことがわかる。統監府時代始まった警察組織の強化は日韓合邦以後にも続き、民間の日常生活全般にその影響力を及ぼしていた²⁷。

また、当時の文化財保存行政は王陵盗掘、遺物密売などが成行した当時の時代状況からみると、文化財関連事件解決という立場から行われたことが指摘できる。

(6) 「保存規則」の特徴2－古蹟調査委員会の性格

「保存規則」と古蹟調査委員会の関係を通して当時文化財行政の状況を読み取ることができる。

古蹟調査委員会は、朝鮮総督府の古蹟保存並びに調査に關する諮問機関であるとともに、調査・保存の事務機関であったという²⁸。古蹟調査委員会は「保存規則」に基づいて文化財を登録する際、それを審議・決議することにとどまらず、古蹟調査並びに保存事業を計画・実施する実行機関としての性格が強くみられる。

つまり、古蹟調査委員会は自らの調査と「保存規則」に基づき収集された各種資料によって韓半島全域にわたる文化財の現状把握が可能であっただろう。しかも、一步前進してその維持管理や保存対策まで立案し実行にうつす力を持つ、いわゆる文化財行政全般の求心的存在とも言える。

(7) 「保存規則」の特徴3－慶州遺蹟・遺物と建造物の漏落

1902年最初の調査から関野貞がその重要性をあげた仏国寺とその関連遺物は、1916年「保存規則」によっては登録されなかった。それは1913年設立された慶州古墳保存会と関係があると考えられる。慶州古墳保存会は、慶州地域の古墳、遺物、寺址などの調査、保存を目的として芬篁寺塔竝石造物、仏国寺石塔、石橋その他の石造物、石窟庵石造物に対する修繕工事及び保存上必要な工事を行う。皇龍寺址、四天王寺址

については寺域を調査し平面図を作成するなどの調査事業を主におこなった²⁹。慶州地域遺蹟保護の緊急性によって発足された慶州古墳保存会は、「保存規則」制定後にもその規則に吸収されることなく、独自に調査・保存事業を行った。つまり、この段階まで「保存規則」とそれを法的根拠にした保存事業は韓半島文化財保存行政全体を統括する段階までは至らなかったといえよう。

「保存規則」では慶州瞻星臺などの石造関連物以外の木造建築物に關しての言及がない。寺院所有の建築物や宝物は総督府の宗教局が管理し、客舎・樓亭・城門などは国有財産として土木系の管轄であり、法令によって制限する必要はないという見解があったという³⁰。当時古建築物に關してはその責任所在が不明であり、各部署からの問い合わせがあるとき古蹟調査委員会が助言する程度であった。つまり、「保存規則」の保存対象に建築物は含まれていなかったのである。

「保存規則」の決定的不備について藤島亥治郎氏も指摘している。藤島氏は朝鮮半島古建築物の保存の目的として「日本の古建造物統一上便宜ではなからうかと思ふ」と言いながら、古蹟調査委員会が建築物には関心が及ばないことを指摘している。しかも、莫大な費用が要る建築物の保存事業や修理などは後回しされる傾向が強いと指摘し、日本の古社寺保存会分局を朝鮮に設置すること³¹などを提案した。また、所有権に制限を加えるにも係らず、総督府令で定められた形式上の欠陥、事務の主管関係においても適切ではない内容上の不備が挙げられた³²。ここで「事務関係」云々は警察との密接な関係が時代状況と合わないことを意味していると思われる。

関野貞の助手として早い段階から朝鮮古蹟調査に携わっていた谷井濟一は、「寺院内のものは寺刹令等の発布もあり相応取締もつき居れ廃寺址のものは散逸の恐多く当局者も目下其取締方法について考究中にて御座候」³³という文を残している。また、遺物への接近を制限するなど、最も一次的管理に保存行政の重点をおいていることから、「保存規則」の大き

登録番号	名称	地方	関野貞との関係		登録番号	名称	地方	関野貞との関係	
			等級	調査年度				等級	調査年度
2	大圓覚寺碑	京城	乙	1909年	76	萬福寺址刹竿支柱	南原	乙	1910年
3	普信閣鐘	京城	乙	1909年	81	羅州東門外石幢竿	羅州	乙	1910年
11	三田渡清太宗功德碑	廣州	乙	1909年	82	羅州西門内石燈	羅州	乙	1910年
23	靈通寺址大覚国師碑	開城	甲	1911年	84	光州邑東五重石塔	光州	乙	1910年
24	靈通寺址五重石塔	開城	乙	1911年	85	光州邑西五重石塔	光州	乙	1910年
25/26(?)	靈通寺址三重石塔	開城	乙	1911年	86	光州邑北門外石仏像	光州	丁	1910年
27	慶玄化寺碑	開城	甲	1911年	88	新羅太宗武烈王陵碑及龜趺	慶州	甲	1909年
28	慶玄化寺七重石塔	開城	甲	1911年	90	慶州瞻星臺	慶州	甲	1909年
29	開城瞻星臺	開城	乙	1909年	91	掘佛寺址刻仏像	慶州	甲	1909年
30	善竹橋	開城	丙	1909年	97	望徳寺刹竿支柱	慶州	乙	1911年
31	江華鐘閣鐘	江華島	丙	1909年	98	淨恵寺址十三重石塔	玉山	甲	1911年
43	扶餘邑南五層石塔(平百濟塔)	扶餘	甲	1909年	101(?)	慶州羅原里五重石塔	慶州	乙	1909年
44(?)	扶餘邑南石仏像	扶餘	乙	1909年	123	平壤箕子井	平壤	丙	1909年
45	劉仁願紀功碑	扶餘	甲	1909年	124	平壤停車場前七重石塔	平壤	乙	1909年
69	彌勤寺址刹竿支柱	益山	乙	1910年	125	平壤鐘閣鐘	平壤	乙	1909年
70	彌勤寺址石塔	益山	乙	1910年	127	慈福寺址五重石塔	成川	乙	1911年
72	益山古都里雙石仏像	益山	甲	1910年	137	演福寺鐘	開城	甲	1909年
73	萬福寺址石仏像	南原	甲	1910年	138	益山王宮塔五重石塔	益山	甲	1910年
74	萬福寺址五重石塔	南原	乙	1910年	140	興徳王陵	慶州	甲	1911年
75	萬福寺址石座	南原	乙	1910年					

＜表2、「古蹟及遺物保存規則」の登録物件のうち、関野貞によって調査されたもの＞

な目的は、遺物の散逸を防止することであったことがわかる。

また、遺物の発見者に届出の義務があり、それを総督府に報告・登録するという過程から「保存規則」では、どこに何があるかという、韓半島における遺蹟・遺物把握に重点をおき、文化財のデータベース化を図ったともいえるであろう。

古建築物については 1902 年関野貞によって始めて調査され、以後の調査でも主要な対象であったにもかかわらず、朝鮮総督府による文化財の保存事業が古蹟・遺物を中心にその維持管理を優先する方向であった。そのため古建築物が文化財保存行政の枠組みに入るのは 1933 年の「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」の制定まで待たなければならない。

5 結

植民地時代韓国における古建築物の認知、保存すべきモノという概念がどの程度浸透していたのだろうか。1928 年、ソウルでは城門の取り壊しが話題になった。その一連の経緯を巡ることで当時の古建築物に関しての認識の一面が窺われる。

破壊の対象になった光熙門、東小門、彰義門は昭義門とともに四小門と呼ばれた³⁴。当時城門の破損が甚だしく大修理を加えなければ危険な状況で、不審者たちの巣窟にされていたという。当該部署である朝鮮総督府官有財産係は、管轄警察署からも何らかの改善方法を求められた。官有財産係はまず京城府の意見を聞いたところ、国費で保存するならば京城府で管理してもよいという消極的な立場を示した。また、当時文化財保存行政を担当していた朝鮮総督府宗教課からは、光熙門・東小門に関しては、保存するほど歴史的価値のあるものではないという答弁が帰ってきた。最終決定を責められた官有財産係は結局光熙門、東小門を落札につき取り壊しを決めた³⁵。当時城門を取り巻く状況から各行政側の意見の違いは厳しく、その取扱いに関しても曖昧であったことがわかる。

古建築物に対する葛藤は城門だけでの問題ではなかった。関野貞の調査によって、漠然としながらも韓半島の古建築の現況を把握しておきながらも、韓半島における文化財保存行政の最初の試みである「保存規則」の枠組みに建築が排除されたことから、当時の古建築物が置かれた状況が予想できる。

日本では、1919・1929 年に次々と「史蹟名勝天然記念物保存法」・「国宝保存法」が制定され、文化財保存行政も新しい局面を迎えた。またその影響をうけ韓半島にも 1933 年「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」が定められ、この法律により古建築物は文化財という制度内で保存されることとなった。

植民地韓半島の文化財保存について言及するとき、「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」の制定は様々な意味で検討すべき事件である。形としては日本で実行されていた文化財保存関連法律をなぞりながらもその実態は異なる面が多くみられる。そこにはフィールドが韓半島であること、またその地で求めていたもの、得たかったものが重要な論点になったと考えられる。

日本の保存関連法との関係を念頭におきながら、「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」の内容と、その根拠から指定された古建築物を探る。そのことで、古建築物の文化財への変遷とその保存行政について稿を改めて追跡していきたい。

¹ 鬼頭清明、「文化財保護行政史ノート」『歴史評論』No.249、歴史科学協議会 1971.5

² 藤田亮策、「朝鮮古文化財の保存」『朝鮮学報』第 1 輯、朝鮮学会、1951.5

³ 西川宏、「日本帝国主義下における朝鮮考古学の形成」『朝鮮史研究会論文集』、1970.6

⁴ 韓三建 他、「1902 年から 1910 年までの関野貞による韓国建築調査について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（東海）、1994.9、1169-1170p

⁵ 木曜クラブ、「特集 建築史・考古学・関野貞」『考古学史研究』、1997.12

木曜クラブ、「関野貞と朝鮮古蹟調査」『考古学史研究』、2001.5

⁶ 1909 年リストは、関野貞、『朝鮮芸術之研究』、度支部建築所、1910 年のリストは、関野貞、『朝鮮芸術之研究続編』、1911

⁷ 1911 年のリストは、『朝鮮考古資料集成 13』、出版科学総合研究所、1983、に掲載されている。

⁸ 当時の正式国名は「大韓帝国」であり、本稿では「韓国」と略称する。地域としては韓半島を指す。

⁹ 関野貞、「韓国建築調査報告」『東京帝国大学工科大学学術報告』第 6 号、1904、2p

¹⁰ 関野貞、前掲書（注 8）、2p

¹¹ 関野貞、前掲書（注 6）

朝鮮総督府、『朝鮮古蹟調査略報告』、1914

¹² 藤田亮策、前掲書（注 2）、249p

¹³ 1912 年 4 月 10 日から 3 日間東京帝国大学工科大学建築学科教室で開催された展覧会には、当時古蹟調査から収集した瓦、古文書、拓本、写真などを「朝鮮之部」として廊下および第 3 室と廊下に陳列した。「彙報—東京大学工科大学建築学科第 4 回展覧会（上）（下）」『考古学雑誌』第 2 巻 第 9・10 号、1912.5/6

¹⁴ 伊藤純、「李王家博物館開設前後の状況と初期の活動」『考古学史研究』第 9 号、京都木曜クラブ、2001.5

¹⁵ この端緒により 1909 年調査では「丙等級」であった京城東大門は、1910 年調査で「乙等級」に変更された。

¹⁶ 関野貞 他、「朝鮮古蹟調査略報告」『朝鮮考古資料集成 13』、出版科学総合研究所、1983

¹⁷ 高橋潔、「関野貞を中心とした朝鮮古蹟調査行程」『考古学史研究』、木曜クラブ、2001.5、32p

¹⁸ 関野貞、「朝鮮古蹟調査略報告」『朝鮮芸術之研究』、1910

¹⁹ 旭邦生、「朝鮮における古芸術品及び古蹟の保護」『朝鮮及満州』第 64 号、朝鮮雑誌社、大正元年 12 月、2p

²⁰ 「考古学会記事—史蹟保存に関する建議書草案」『考古学雑誌』第 2 巻 第 5 号、1912.1

²¹ 朝鮮総督府、『古蹟及遺物登録台帳抄録』、1928、154p

²² 朝鮮総督府学務局古蹟調査課、『古蹟及遺物登録台帳抄録』、1924

²³ 関野貞、前掲書（注 17）、12p

²⁴ 藤田亮策、「朝鮮における古蹟の調査及び保存の沿革」『朝鮮』第 199 号、1931.12

²⁵ 藤田亮策、「朝鮮古蹟調査」『古文化の保存と研究』、黒板博士記念会編、1953、342p

²⁶ 「小官各地方における遺物を調査し、其保存の方針及方法等に就き、懷抱する所の意見頗る多し、他日別に報告する所あらんと欲するなり。」関野貞、前掲書（注 17）、2p

²⁷ 1916 年 7 月 4 日官報に警察署長または、警察署の事務を取り扱う憲兵分隊の長を含むという文書が見当たる。

²⁸ 孫植睦、『日帝強占期都市社会相研究』、一志社、1996、37p

²⁹ 藤田亮策、前掲書（注 23）、93p

³⁰ 「彙報—慶州古墳保存会」『考古学雑誌』3 巻 11 号、1913.7

³¹ 藤田亮策、前掲書（注 23）、95p

³² 藤島雅一路、「最近除去されたる城門を弔ひ朝鮮古建造物保存問題に及ぶ」『朝鮮と建築』、1928.8、2-6p

³³ 朝鮮総督府、『朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存要目』、1934、1p

³⁴ 谷井清一、「朝鮮通信（一）」『考古学雑誌』第 2 巻 第 2 号、1911.10

³⁵ 四小門とは、14 世紀後半漢陽（ソウルの旧地名）建設の際、四大門とともに設けられた城門のことで、光熙門（東南）、東小門（北東）、彰義門（北西）、昭義門（西南）と称する。昭義門は、1914 年京城都市計画により取り壊された。光熙門・東小門は、1928 年取り壊され、1975 年復元された。

³⁶ 藤島雅一路、前掲書（注 31）、4p